**平成23年1月11日発行の山陽新聞朝刊で記事が紹介されました**

**（平成23年1月13日　山陽新聞社より転載許可承諾済）**

# 岡山発の技術 産廃を再生

## プラスチックやアルミ 比重で選別

## 平林金属、岡山大

北海道の処分場の破砕くず。岡山発の最新技術でリサイクルされる

最終処分場に埋められた15年前の産業廃棄物を掘り返し、岡山発の最新技術でリサイクルする事業が今春、北海道で始まる。スクラップ処理業の平林金属（岡山市北区下中野）と岡山大などが共同開発した比重分離装置を活用。自動車や家電製品の破砕くず（シュレッダーダスト）から、かつては選別が難しかったプラスチックやアルミを回収する。

（長田憲司）

比重分離装置は、岡山大大学院自然科学研究科の押谷潤准教授の研究を基に開発。砂や金属粒子に空気を送り込み、比重の違いによって浮く物質と沈む物質を分ける仕組み。

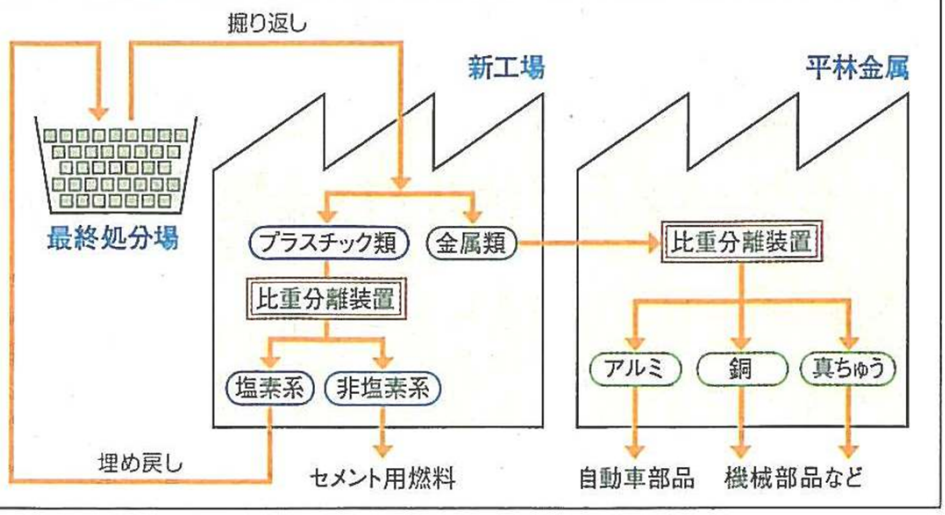
## 北海道で今春開始 処分場掘り返す

掘り返すのは、北海道登別市の民間管理型処分場。1995年から破砕くずを受け入れ、30万立方㍍がほぼ満杯になっている。リサイクル技術が進歩した時に再び取り出せるよう、1辺約1㍍の立方体に圧縮し、ビニールで梱包して埋めていた。

計画では、スクラップ処理業の鈴木商会（札幌市）が処分場の敷地内にリサイクル工場を建設し、比重分離装置を導入。破砕くずから金属類を取り除き、残ったプラスチック類を装置で選別する。

比重の軽いプラスチックは北海道内のセメント会社に燃料として販売。塩素分を含む重いプラスチックは燃やすと炉を傷めるため、処分場に埋め戻す。金属類は平林金属のリサイクル工場で比重分離し、アルミは自動車部品、真ちゅうや銅は機械部品などに再生する予定。

1立方㍍の破砕くずから3千～4千円相当の資源を回収できる見込み。埋め戻す量も約10分の1に減らせる。3月から稼働させ、14年かけて処理する。

鈴木商会の菅原道紀生産システム改善部長は「民間管理型処分場の掘り返しは全国初。優れた選別技術のおかげ」と評価。平林金属技術開発センターの山川直也課長は「全国の処分場に多くの資源が眠っているはず。処分場の延命にもつながり、掘り返しリサイクルを広げる第一歩になれば」と話している。

**処分場掘り返しリサイクルの仕組み**